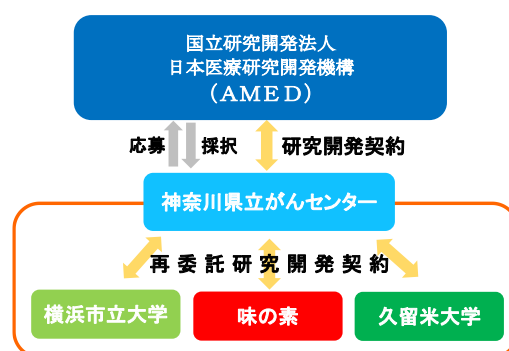




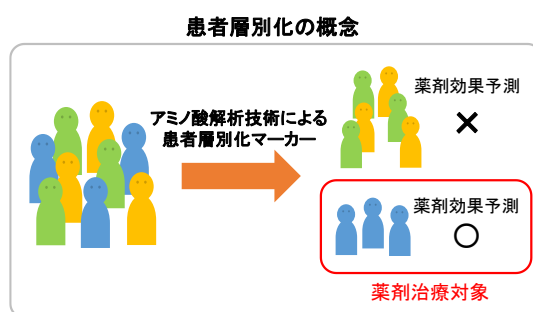
神奈川県立がんセンター（臨床研究所、がんワクチン・免疫センター、呼吸器内科）が次世代治療・診断に向けた研究開発を開始

地方独立行政法人 神奈川県立病院機構 神奈川県立がんセンター（総長：中山治彦）では、臨床研究所、がんワクチン・免疫センターが中心となって病院（呼吸器内科）と連携し、次世代治療・診断に向けた研究開発を開始いたします。

本研究は、国立研究開発法人日本医療研究開発機構（Japan Agency for Medical Research and Development；AMED）の平成31年（令和元年）度「次世代治療・診断実現のための創薬基盤技術開発事業（患者層別化^{※1}）マーカー探索技術の開発」に係る公募に採択（2019年～2023年：研究費 総額9億1,650万円（予定））され、神奈川県立がんセンターを代表機関として実施するものです。本研究では、公立大学法人横浜市立大学、学校法人久留米大学、味の素株式会社と共同で、アミノ酸プロファイル解析技術を活用したがん治療の患者層別化マーカー探索に関する研究を推進します。



がん患者の治療においては、副作用が少なく、かつ効果が期待できる治療法を選択するための検査方法として、薬剤の効果を予測する「層別化技術」の開発が喫緊の課題となっています。より適切な治療法の選択を可能にすることは、患者の身体的負担の軽減や医療費の削減にもつながります。現在、臨床で使用されている免疫チェックポイント阻害剤^{※2}の患者層別化技術は、主に腫瘍組織における標的分子等の解析によるものですが、治療効果や副作用の予測という点において途上段階にあります。今後疾患の状態に応じ、さらに適切な治療を行うためには、効果を予測するマーカーとして、より精度の高い解析技術の開発が必要とされています。



こうした状況の下、本研究では、血液中のアミノ酸を指標とし、マーカーとして実用化することを目的とした患者層別化技術の開発を行います。アミノ酸はたんぱく質や核酸などの生体成分やエネルギー源として利用される栄養素であり、がん細胞の増殖やがん免疫微小環境^{※3}の制御にも必須であるため、個人差に基づく奏功性の高い精密医療の実現にも貢献するものと考えます。本研究の具体的な取り組みとしては、神奈川県立がんセンター総括の下、横浜市立大学、久留米大学および味の素株式会社の産学連携体制で、免疫チェックポイント阻害剤で治療される肺がん患者において血中アミノ酸プロファイルと臨床効果との関係を調べる臨床試験を実施し、がん患者の層別化バイオマーカーとしての有用性を証明することで臨床検査薬として実用化する計画です。なお、神奈川県立がんセンターと味の素株式会社とは、がんの早期発見につながる検査としてアミノ酸プロファイルを用いた「アミノインデックス技術」を共同で開発してきましたが、今回は長年の研究で培ったアミノ酸に関する知見と技術を応用して、次世代治療・診断に向けた研究開発を推進いたします。

※1）たくさんのデータを、そのデータから得られた特徴を利用することによってグループ分けすること。

※2）免疫本来の力を回復させてがんを治療する免疫療法剤。

※3）がん細胞によって形成される局所環境。血管新生の促進など正常組織とは異なる生体反応が認められます。

（問い合わせ先）

地方独立行政法人 神奈川県立病院機構
神奈川県立がんセンター
がんワクチン・免疫センター 笹田
電話：045-520-2222（代）
メール：tsasada@kcch.jp